

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第148号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成19年6月21日

ギンザンマシコ



2006.11.23 札幌市南区真駒内公園

撮影者 品川 睦生 (札幌市南区)



も く じ

私の探鳥地 (53) 道立真駒内公園とその周辺	
札幌市南区 品川 睦生	2
餌付け・餌やりについて考える	
帯広百年記念館学芸員 池田 亨嘉	4
北海道におけるキバシリの繁殖期の分布	
美唄市 藤巻 裕蔵	6
幌加内町母子里における暖候期の鳥類相	
札幌市東区 山田 雅仁	8
平成19年度総会報告	10
探鳥会ほうこく	12
探鳥会あんない	16
鳥民だより	16

私の探鳥地 (53) 道立真駒内公園とその周辺

札幌市南区 品川 睦生

真駒内公園の近くの現在の家に住みだしてから約15年になりましたが、当初この公園は探鳥地と言うより私の散歩コースで、公園内の外周遊歩道を約3km歩くのでした。春の5月初旬にはカタクリ、マイヅルソウ、エゾエンゴサク、スマレなどの群生を見ることができます。公園内には何種類かのサクラが植えられており、長い間その花を見ることができます。真駒内公園から北海道青少年会館につながる「ふるさと散歩道」は、カタクリの群落のほか、エンレイソウ、ミヤマエンレイソウ、フクジュソウ、エゾエンゴサク、キバナノアマナなどが咲く花畑として見る人を楽しませてくれます。でも、最近少し荒れてきたのが心配です。また、多くのモミジやナナカマドなどが植えられているので、秋には紅葉も楽しむことができます。

公園の大きさは約85haで、緑地面積だけでも約46haあります。総延長10kmの遊歩道があり、ジョギング、ウォーキング、サイクリングにも利用されます。また今年の冬のシーズンから外周道路が整備され、歩行者用と歩くスキーの通路が区分され整備されたので、冬でも歩きやすくなりました。

この公園の歴史は明治9年にエドウィン・ダンが来札して「真駒内放牛場」が開かれてから始まり、その後、本町を除く真駒内全域が種畜場として、酪農の改良や普及に大きな役割を果たしました。終戦後は米軍に接収されて基地が建設されましたが、その付帯施設として設けられた米軍専用ゴルフコースがほぼ現在の園地に相当するそうです。その後道営の森林公園として造営が始まりましたが、昭和47年の冬期オリンピック札幌大会の主会場となり、屋内・屋外の競技施設が造られました。公園造成も平行して進め

られ、昭和49年に造成完了、一般に開放されたのは昭和50年8月からです。

この公園で鳥を見たり、また写真に撮るようになったのは、今から2年前、見知らぬ人からこの公園内に流れている真駒内川でヤマセミを見ることができると言われ、半信半疑でカメラを担ぎながら散歩したのが始まりでした。

まず外周道路を一回りすると、ハシブトガラ、シジューカラ、ゴジュウカラなどのカラ類、そしてアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリなどを見ることができます。またキノコ広場西側のトドマツ林の中にはエゾリスが生息しています。誰がするのかわかりませんが、木の幹にペットボトルを使用した餌台が設置されており、冬場にはエゾリスやカラ類を見ることができます。太陽の広場には人工池があり、ポンプアップされた水が用水路を流れて流れています。この池にはアヤメ、カキツバタ、ミズバショウの花が咲きます。またマガモが30羽ほどおり、公園を散歩する人から餌をもらう風景を見ることができます。

公園内の中央橋から真駒内川沿いのサイクリングロードを上流に向けて歩いていくと、いよいよお目当てのヤマセミやカワガラスなどを見ることができます。2005年10月から2006年4月頃までは行く度に見ることができました。2005年には子育てをするのを見ることができたそうですが、2006年は残念ながら見られませんでした。過去にはこの公園近くの真駒内川沿いの崖でカワセミが営巣していたそうです。残念なのはこの川で子育てしていたカワガラスの営巣中に、川の調査を行っている人が営巣場所に近づき、これが原因か、夏から秋にかけてはカワガラスを見ることができませんでした。でも、昨年11月と今年3月には姿を確

認していますので、また営巣することを期待しています。

2006年秋の渡りのシーズンには大変にぎわいました。10月の初めから太陽の広場の小さな池のマガモの中に1羽にオスのオシドリが混じっていました。このオシドリは結構気の強い鳥で、自分より大きなマガモを追いかけてたり、公園を散歩する人から餌などを貰い元気にしていたのですが、11月末になると元気が人工池の隅でじっとしているようになりました。12月初旬、池が結氷すると何処かに飛んでいったようです。10月初旬にはイカルの群れがサクラの木の下でしきりに餌をついばんでいました。11月初旬から約1ヶ月は公園内のナナカマドやシラカバの木に、ヒレンジャク、キレンジャク、ツグミ、ハチジョウツグミ、ウソ、アカウソ、マヒワ、アトリなどが次々と現れ楽しませてくれました。多い時には100羽ほどの群れが2箇所を確認できました。渡ってきた当初の11月初旬には、遊歩道の側のナナカマドにとまって実を食べるのに夢中で、人が木の下を通っても飛ぶ事もなく、じっくりと写真を撮ったり、双眼鏡で観察することができました。最後にはギンザンマシコのおス・メスが現れ、鳥を見る人を楽しませてくれました。

その後は真駒内団地や水源地通りで見ることできたそうです。

帰りにぜひ寄っていただきたい施設があります。その一つがこの公園に併設されている札幌市豊平川さけ科学館です。館内にはサケに関する展示がされており、多くのサケの仲間が水槽に飼育されています。また屋外観察池では夏には餌やりが体験できます。秋にはサケが卵を生む様子を観察できるそうです。1～2月には孵化したサケの赤ちゃんが展示され、春には放流体験ができます。

地下鉄真駒内駅近くのエドウィン・ダン記念館にも寄って下さい。この記念館は真駒内公園の前身である旧北海道庁種畜場にあった庁舎が移設されたものです。そこには、北海道の開拓の中で牧草地や畜産施設の整備に尽力し、わが国の農業・畜産を発展に導いた功労者であるエドウィン・ダンについての資料が展示されています。また記念館の隣に植えてあるオンコにはエゾヤマザクラが「実生」しており、毎年春には美しい花を見ることができます。

なお、真駒内公園の駐車場は4月29日から11月3日まで土・日・祝は有料となりますので注意してください。



真駒内公園とその周辺図

餌付け・餌やりについて考える

帯広百年記念館学芸員 池田亨嘉

餌付けは「コントロール」されるべき時代になったと思います。また、単純にやるやらないの論議ではなく、情報を集め、地域の環境をひろく見る目が大切です。

はじめに

日本各地で餌付け規制が始まっています。厚岸町、音更町十勝川温泉、ウトナイ湖サンクチュアリ鳥獣保護区、宮島沼、栃木県羽田ミヤコタナゴ生息地、東京都井の頭公園などです。また、昨年までのスズメの減少疑惑は、原因の一端がえさ台に求められています。

札幌では北海道新聞野生生物基金の「餌やりの功罪を考える」やスズメネットワーク主催のフォーラムが開催されました。(http://sparrow.lowtem.hokudai.ac.jp/)

私の所属する日本野鳥の会十勝支部でも課題になり、同じく所属する「エゾリスの会」でも市街地の公園では餌付けを奨励しないことになりました。このように「餌付け・餌やり」は社会的な論議の対象になりつつあります。

餌付け・餌やりとは何か

まず、人があげる「餌」とは何でしょうか？餌と生ゴミはどう違うのでしょうか？「ゴミ」は不要なので捨てるものです。「餌」はこの場合、野生動物に食べさせるために、自然に向かって出すものです。自然から見てこの二つは、多くの場合、環境とは無関係に投入された栄養分という点で同じものです。それをカモが食べるか、昆虫が食べるか、クマが食べるか、バクテリアが食べるか……。カモなら餌でカラスやハエならゴミなのか？「餌かゴミか」は「その人にとって好ましい生き物にそれを食べさせたいか否か」で変わって来ると思いますが、それは言い方が変わっただけです。人の思いからの規定であって、自然からの規定ではないようです。

「餌付け・餌やり」の本質とは何でしょう？

人間は様々な野生動物を家畜家禽化してきました。そのプロセスに「餌付け」が用いられたと想像できます。「餌付け」は人間の「才能」かもしれません。その才能でタンチョウやシマフクロウ、そのほかの様々な種を絶滅の縁から押し戻そうとしています。また、調査のために餌を使ったり、もちろん身近に鳥たちの姿を見てその存在を知り、愛着を持つためにも使ってきました。餌付けの原点には理屈はないと思います。好奇心・支配欲・物欲・隣人へのも

てなしかもしれません。そのような本能的なものがなぜ問題になっているのでしょうか？「その本能がコントロールされていないから」というのが筆者の考えです。人間の本能欲望は法律などでコントロールされていますし、家庭のゴミ出しにもルールがあるのですから、餌付けにルールがあっても不思議ではありません。

餌付け・餌やりの問題点

1. 感染症の発生

中国青海省のインドガン保護区の繁殖センターでは、その野生復帰を行っています。問題は、青海湖周辺ではインドガンが家禽化、食用化され、その一部を放鳥していることです(日本野鳥の会HP)。ここで2004~06年、高病原性鳥インフルエンザによる水鳥の大量死が発生しました。とくに2005年は1,000羽に達したようです。昨年西日本で発生した高病原性鳥インフルエンザは、青海省のウイルスとほとんど同じものでした。

この情報を追い、鳥類の大量死は世界で頻発していることを知りました。日本で大量死が起きていないのが不思議なくらいです(スズメに起こったかもしれませんが)。

鳥類にはたくさんの感染症がみられます。以下のことから、餌付けはその発生を助長すると考えられます。

① 生物間の距離を縮めすぎる。

環境ごとに分散するはずのものが肩寄せ合い、その排泄物を多様な水鳥、人間、カラス、スズメ、ドバト、アヒル、キツネやペットまでが踏んでいます。

② 土壌や水底に汚れを蓄積し、病原体を増殖させる。

③ 群れを密集・固定することで、病原体を群れの中で増殖させる。

④ その群れが渡ること、世界的な感染を引き起こす可能性がある。

青海省の例は③と④にあたる可能性がありますが、この場合は飼育放鳥なので、餌付けよりももっと強く鳥を集中させています。タンチョウでも寄生虫が多く個体で確認されており、希少種の保護と感染症の発生は背中合わせに思えます。餌付け場の分散や自然越冬の場が求められているのは、このような背景もあります。

鳥はうがい・手洗いはできないのです。

2. 水質汚濁

羽田ミヤコタナゴ生息地保護区では、絶滅危惧種ミヤコ

タナゴが産卵する二枚貝が減少し、魚が壊滅しかかっています。ハクチョウへの餌のため栄養分が蓄積し、雪解け時に一気に流れ出すためです。

筆者の職場近くの周囲400mの池で、餌の総量を調査に基づいて計算した結果、4月から11月の間で500kg、少なくとも見積もっても300kgと試算されました。これに30kgのお菓子が上積みされます。この池では風向きによって「パンの白い泥」が岸辺に漂着します。パン1枚50gとして、一人平均2枚投じた場合、一日何人で年間何kgになるか計算してみましょう。日本全国での総量は……？

3. 行動・生態への影響

カモのオスは子育てに参加せず分散して暮らします。餌にそのオスたちが集まります。中にはまだ発情しているオスがおり、母ガモを激しく追い立てるものがあります。これを筆者は「ストーカーオス」と呼んでいます。オス20対母ガモ1という状況を想像してみてください。母ガモは追われ追われて、ついに帰ってきません。ヒナたちは母を捜して鳴きますが、帰ってきません。そのヒナはパンに餌付き、同時にやはりパンに餌付き繁殖期のカラスに補食されます。

自然の状態でもヒナは補食されますが、人間がその橋渡しをしているのです。カラスの多さの原因と考え合わせると、これは2重の餌付け問題です。池では少なくとも年間10羽のヒナが補食されていると思います。カモのヒナの本来の餌は昆虫です。筋肉、骨格を作るのにパンを食べる場合ではないはずで、カモの成体の採食時間は主に夜だということを知らない方も多いようです。

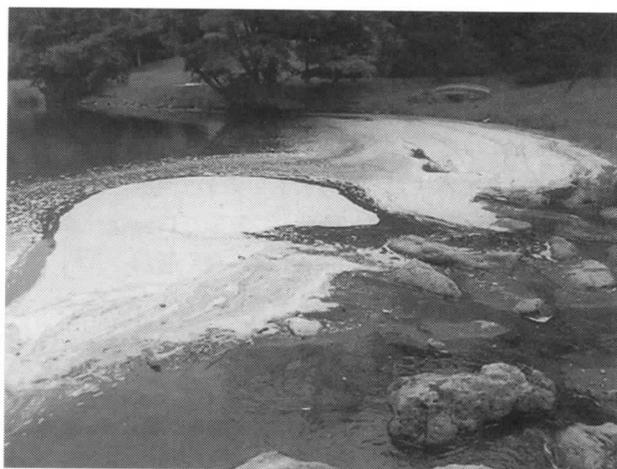
井の頭公園では、パンのため魚を捕らず、親離れが遅いカイツブリが見られています。



ストーカー♂ (手前にヒナ)

4. 農作物被害

農家の方は、ハクチョウが畑から逃げなくなったのは、観光地で餌をもらってるからと思っています。一方、観光地で餌付けをやめれば、食害が増えると考え方もあります。確かに少雪の年や雪解け時期に、食害が拡大する可能性があります。餌付けを続ければ、より多くの鳥が来続けるの



パンの泥の漂着

ですから、被害が減る保証はありません。どちらにしても、生産者が一方的に我慢を強いられるような状況は避けなければいけません。

餌付けはこんな進退が難しい問題を生んでしまいます。

5. 環境教育的問題

① 餌台マナーの消滅？

日本野鳥の会は餌台は越冬期のみを推奨していたはずですが、もはや忘れ去られているようです。マナーがあれば説明が必要になるので、環境教育的価値はあるでしょう。それがいまや野放図になりかかっています。

② 水鳥の餌付けの社会的論議不足

水鳥に関して、ルールが論議されたことは無く、ほとんど野放図のまま今に至っております。データも少なく、社会で話し合うための基礎がほとんどありません。

③ 多いのか、集まっているのか

「多い」＝「良い」と私たちは思いがちですが、そうは言い切れません。餌付けが盛んになってから、カモが見られなくなった自然の水辺は複数あります。自然の状態ではさまざまな小さな水辺に分散しているものが、餌でごっそりとかき集められている可能性があります。水鳥が自然を反映しない状況が作られています。

④ 観察していない

多くの方は、餌をやり終わったら帰ってしまいます。ずうっと水鳥の行動を観察される方は少ない。たとえ求愛ディスプレイをしても、やめて餌に来ます。餌付けが自然への関心を高めるとはある一面のことで、自然への誤解を広げているのかもしれない。

6. 餌付けの本質的問題

餌付きやすい種類とそうでない種類、すべてに平等に餌をやることはできません。結局、人気のある鳥や、元々多い鳥、なつきやすい鳥だけを利することになります。これは差別にすらおもえます。

ペットなら亡くなって葬るまで面倒を見ます。しかし野生動物にはやれるときだけ餌をやってメンコするだけです。この違いはどういうことなのでしょう。ペットで言われる責任論はどこへ？

餌付けを見て不快だと思う人もいます。

7. 餌付け依存症

餌台用の松の実を置いてある倉庫にエゾリスがきて、毎年数匹ずつ車にひかれていたのを知っていて、それでもリスに餌をやりたいとおっしゃったお年寄りがおられます。

餌付けで栄養状態がよくなりリスが増え、それが道を渡って自分の倉庫に来て車にひかれる。それでもやめたくないと思ってしまう。長い間餌付けをし続けると、断ち切るのは精神的に非常に難しいようです。ただその気分は何となくわかる気もします。それだけに、怖いな、と思います。

8. 社会的責任の所在

餌付け問題を「餌をやる人」だけの責任に押しつけてはいはずはありません。ですから個人で直接、餌付けをやめ

させようとする行為は、業務でない限りあまり推奨しません。むしろ公共の立場の方たちが役割を果たし「論議の社会化」を行うことが大事です。

自らが普及したマナーを徹底し、水鳥についても論議をすることができます。また、感染症に関連して大きな存在感を示すことができるはず。公園や河川の管理者は社会的に中立な立場から、論議や管理の場を提供することができます。環境省はそれらの行動に一定のお墨付きを与えることができます。調査研究の方はさまざまな考える材料を提供することができます。

マスコミは「ヒマネタ」として自然を扱い、餌やりに善行のレッテルを貼るのは考え直した方がいいと思います。また、餌付け問題の社会化について重要な立場にいることは論を待たないでしょう。

鳥見人は、まずはいい悪いではなく、自然の見方を増やすつもりで観察してみてください。それが未来の自然を支えると思います。北海道新聞野生生物基金「モーリー」15号「野生動物への餌やりの功罪を考える」にはさまざまな論議が提示されています。参考にしてください。

北海道におけるキバシリの繁殖期の分布

美 唄 市 藤 巻 裕 蔵

キバシリは森林に生息する留鳥であるが、生息数はそれほど多くはなく、森林で調査しても優占種になるようことはない。そのためか、この鳥の分布についてはよく知られていないようである。これまでの自分の調査結果と各種報告書などの記録を用いて、キバシリの繁殖期の分布についてまとめてみた。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケス(121号)やコムクドリ(130号)の場合と同じなので省略する。ただしその後も調査を続けており、2006年までに調査した区画(5×5km)の数は734、調査路数は827となっている。分布については全てのデータを用いたが、生息環境別と標高別の出現率、観察個体数については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のキバシリの分布を示した(観察結果は5×5kmの区画で記録しているが、この区画で表示すると細くなるので、10km四方で表示)。分布図を見ると、キバシリは山間部のほか、石狩平野や十勝平野などの平野部にも所々生息している。これは、次の「生息環境」でも述べるよ

うに、繁殖期にキバシリは面積の小さな林には生息しないが、平野部でも広がりのある林には生息しているからである。図1では、渡島半島、後志地方、道北で分布情報の空白部が多いが、これらの地域でもほぼ同じような分布すると考えてよいと思う。

日高山脈と大雪山系を境として森林に限って東西の出現率を比べると、西部では29%、東部では32%で、両地域の間で出現率の違いはなかった。以前紹介したヒヨドリ(本誌136号)では西部より東部で出現率が低く、地域差が見られ、キバシリとは異なっていた。

表1. キバシリの生息環境別・標高別の出現率(%)

生 息 環 境	調 査 路 数	標 高 (m)					全 体
		~ 200	201~ 400	401~ 600	601~ 800	801~	
ハイマツ林	11	—	—	—	—	0	0
常緑針葉樹林	15	20	67	100	67	67	53
針広混交林	147	28	26	30	37	29	29
落葉広葉樹林	164	40	34	38	0	0	40
カラマツ人工林	22	13	27	0	—	—	18
農耕地・林	204	5	5	0	0	—	5
農耕地	234	0	3	0	—	—	0.4
住宅地	30	0	0	0	—	—	0



図1. 北海道におけるキバシリの繁殖期の分布
 一つの区画は約10km四方で、1/25,000地形図に相当する。
 ●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。・=未調査。

生息環境と観察個体数

キバシリは森林の鳥であるが、生息環境別に出現率をみると、ハイマツ帯では出現せず、常緑針葉樹林で53%、針広混交林で29%、落葉広葉樹林で40%、カラマツ人工林で18%で、森林のタイプによって出現率が異なっていた(表1)。また、調査路2km当たりの平均観察個体数は、常緑針葉樹林で 0.5 ± 0.7 (平均値±標準偏差)、針広混交林で 0.3 ± 0.7 、落葉広葉樹林で 0.3 ± 0.5 、カラマツ林で 0.2 ± 0.4 であった。森林以外の環境でもわずかに見られ、農耕地・林で出現率は5%であった(表1)。キバシリはおもに森林に生息するが、農耕地・林のような環境でも一部では生息するので、このことが上述の分布にも反映している。

図鑑などではキバシリの生息環境について「針葉樹林にすむ」(フィールドガイド日本の野鳥)とか、「平地から山地の針葉樹林、針広混交林」(北海道野鳥図鑑)と書かれており、針葉樹との結びつきの強い鳥という印象が強い。しかし、上に述べたように落葉広葉樹林にも針葉樹林や針広混交林と同様に生息しており、観察個体数も針広混交林と同じである。一方、針葉樹林でもカラマツ林にはあまり多くない。ある種の生態の特徴について漠然と観察して得られる印象が、きちんとした観察データに基づいて得られた結論と異なることは、それほど多いとはおもえない。しかし、ここに紹介した繁殖期のキバシリの分布は、なにご

とも具体的なデータが重要であることを教えてくれていると思う。

最後に、森林に限って出現率を標高別にみると、200m以下では34%、201~400mで21%、401~600mで32%、601~800mで29%、801m~では39%で、標高帯によって出現率が異なることはなかった。この点も標高が高くなるにしたがって少なくなるヒヨドリとは違うところである。



キバシリ

幌加内町母子里における暖候期の鳥類相

札幌市東区 山田 雅 仁

はじめに

幌加内町は空知支庁の最北部に位置し、アイヌ語で逆流する川を意味する人口1,900余人(2006年)の町で、現在日本一人口密度の低い町でもある。またソバの作付面積が日本一多いこと、人造湖としては日本一広い朱鞠内、非公式ながら1978年2月17日に母子里で日本一の最寒気温 -41.2°C を記録したことで有名である。

母子里は、幌加内町の最北部に位置し、周囲を山で囲まれた盆地である。また積雪期間が11月上旬から5月上旬までと長いことも特徴である(演習林業務資料、1990)。盆地の底には北海道大学雨籠研究林の庁舎あり、その辺りの標高は288m程である。周辺はごく小さな集落があって、小学校跡地、畑・牧草地、荒地(地形図によれば)などがある。私は2005年と2006年の5月から11月まで、その庁舎周辺の野鳥観察をする機会が得られた。そこで観察できた野鳥種を旬別にまとめ、その記録を報告する。

観察できた野鳥種

野鳥観察は、だいたい午前6時から庁舎周辺の半径約150m位(概ね図1の円に相当)を約40分間歩いて行ない、双眼鏡による目視及び鳴き声によって野鳥種を確認した。しかしそれ以外の時間帯でも確認できた種は記録した。

観察期間中に確認できた種数は53種であった(表1)。そのうちスズメ目は38種を占めた。また観察期間中に1度しか確認できなかった種は15種にもなった。最も多く観察できたのは5月下旬であった。その他に8月中旬と10中

旬にもピークが見られた。以前報告させていただいた北大構内(山田、2002)及びサロベツ湿原(山田、2003)では暖候期にそれぞれ2つ、1つのピークが見られた。北大構内の2つのピークは春と秋の旅鳥の通過によるもので、サロベツ湿原のなだらかな1つのピークは夏季の繁殖のためであった。母子里の春と秋のピークは、旅鳥の通過によるものと思われた。8月中旬のピークを詳しく見てみると、期間中を通して1度しか見られなかった種が3種もあったこと、偶然カワガラスとノビタキを見かけたこと、センダイムシクイとニューナイスズメが最後に見られた時期であったために、たまたま多く観察できたことが原因だと思われた。

観察期間中の17旬のうち約80%以上(14旬以上)の確率で確認できた野鳥種はキジバト、ハクセキレイ、ウグイス、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの11種であった。これらは周辺の景観を反映した母子里の代表的な種である。また母子里で留鳥である可能性があるとされた種は、アカゲラ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの7種であった。それ以外は夏鳥または旅鳥である可能性が高いと思われた。観察期間中、複数の期間で観察できたが、確認の偶然性が高いと思われた種は、主に河川で目撃できたマガモとカワガラスの2種であった。

特徴的なのは、6月頃にカラ類の目撃例がほとんどなかったのに対して、ニューナイスズメの個体数が多く観察された。ニューナイスズメは8月下旬以降になると確認できなくなったが、代わりにカラ類を目撃しやすくなった。

野鳥の個体数は調査していないが、確認種数と関係なく5月下旬に最も多く、季節の進行とともに単調に減少しているように感じられた。また野鳥のさえずりによる鳴き声のにぎやかさは5月下旬に最もにぎやかで、徐々に静かになっていく。7月下旬から8月中旬まではアオジ、ホオジロ、ウグイス順にさえずりが終了した。

北海道レッドデータブック2001に記載されている種で、母子里で観察された種はオオタカ(絶滅危急種)、オオジシギ(希少種)、コアカゲラ(希少種)の3種であった。北海道北部では、個体数が極めて少ないとされているヤマガラスも10月中旬に一度だけ確認できた。

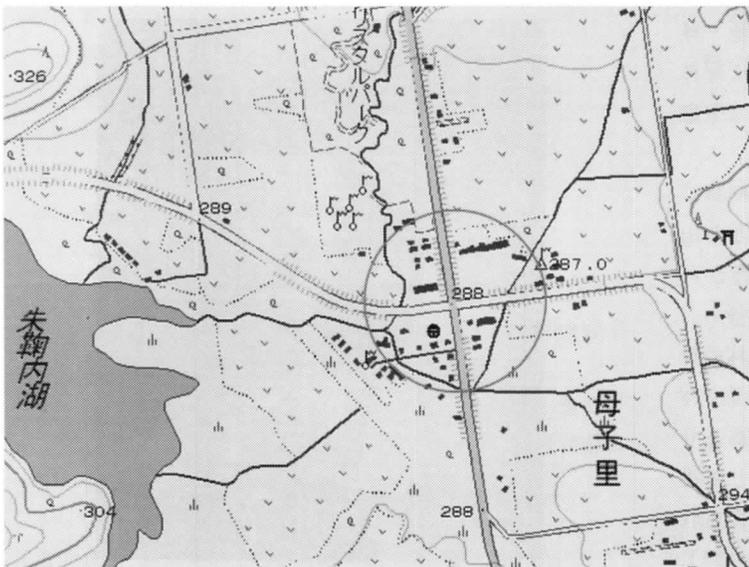


図1 幌加内町母子里の地図と観察範囲
国土地理院地図閲覧サービス(試験公開)より

表1 北海道幌加内町母子里における野鳥観察記録(2005-06年)

月 旬	5			6			7			8			9			10			11			備 考
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
アオサギ			●	●	●	●		●	●	●	●		●		●	●	●					
マガモ			●	●					●													
トビ				●				●	●	●	●	●			●		●	●				
オオタカ											●											2005. 8. 20
チゴハヤブサ											●											2005. 8. 20
オオジシギ			●	●	●	●	●															
キジバト			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				
カッコウ			●	●	●	●	●	●														
ツツドリ			●	●	●	●	●	●				●										
ハリオアマツベメ									●	●	●											
カワセミ										●												2006. 8. 5
ヤマゲラ			●	●																		
アカゲラ			●	●				●	●		●	●	●	●			●	●	●			
コアカゲラ												●										2005. 8. 23
コゲラ											●	●										
ヒバリ			●	●	●	●	●															
ハクセキレイ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●					
キセキレイ			●																			2006. 5. 26
ビンズイ											●											2005. 8. 17
ヒヨドリ																				●		2005. 10. 25
モズsp									●		●											
カワガラス							●				●						●					
ノビタキ				●	●	●					●			●								
マミチャジナイ			●																			2006. 5. 26
アカハラ			●	●					●													
ツグミ																	●	●	●	●		
ウグイス			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				
センダイムシクイ			●	●	●	●			●		●											
メボソムシクイ			●	●																		
キビタキ			●		●	●	●	●						●								
コサメビタキ			●						●	●	●	●										
エナガ																		●				2006. 10. 12
ハシブトガラ			●	●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ヒガラ			●						●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●		
ヤマガラ																				●		2006. 10. 27
シジュウカラ			●				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ゴジュウカラ			●	●			●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ホオジロ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●					
ホオアカ				●																		2006. 6. 10
カシラダカ																				●		2006. 10. 27
アオジ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●					
カワラヒワ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●				
イスカ			●																			2006. 5. 26
ベニマシコ			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●					
イカル			●																			2006. 5. 27
シメ									●	●	●	●	●			●	●	●	●			
ニューナイスズメ			●	●	●	●	●	●	●	●	●											
スズメ			●	●		●	●	●	●	●	●						●	●	●			
コムクドリ				●																		2006. 6. 9
ムクドリ			●	●	●			●												●		
カケス													●	●			●	●	●			
ハシボソガラス			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
ハシブトガラス				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		
合計種数			32	29	19	18	20	20	24	20	29	20	15	16	12	16	21	17	10			



早春の美深越沢川とその周辺 2006年5月27日



庁舎とその周辺 2006年10月12日

むすび

母子里は、人工的な音が少なく、野鳥観察をしていると野鳥の楽園のようにも感じられます。機会があれば、ぜひ母子里で野鳥観察を楽しんでみてください。

文末ではありますが、ヤマガラに関する情報を提供してくださった樋口孝城氏に感謝の意を表します。

引用文献

- 演習林業務資料(1990) 雨竜地方演習林の気象報告母子里観測所(1956~1989). 演習林業務資料, 22: 43-88.
- 山田雅仁(2002) 北海道大学構内の野鳥四季. 北海道野鳥だより, 130: 8-10.
- 山田雅仁(2003) サロベツ原野の繁殖期の鳥類相. 北海道野鳥だより, 131: 4-7.

平成19年度 総 会 報 告

日 時: 平成19年4月6日(金) 午後6時30分~7時50分

場 所: かでる2・7 320会議室

小堀煌治会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成18年度事業報告

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所: カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間: 平成18年4月25日(火)~5月15日(月)

出 典: 11名、18点

(2) 「野鳥だより」の発送(144号~147号)

(3) 新年野鳥講演会、野鳥写真映写会の開催

講 師: 盛田 徹氏「野鳥との触れ合い」

平成19年1月13日(土)、かでる2・7

520研修室

参 加 者: 76名(野鳥写真提供者6名)

(4) 北海道野鳥愛護会名入りカレンダーの作成・販売

(70部)

(5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(6) 傷害保険の更新

[広 報]

(1) 「北海道野鳥だより」144号~147号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

(2) 探鳥会22回(1回平均32名)

[会 計]

(1) 平成18年度決算報告

(2) 平成18年度会計監査報告。大野信明・村野紀雄監事から適正に処理されている旨の報告があった。

2. 平成19年度事業計画

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所: カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間: 平成19年5月8日(火)~5月27日(日)

(2) 「北海道野鳥だより」の発送(148号~151号)

(3) 新年講演会、野鳥写真映写会の開催

平成20年1月予定

(4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)

(5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(6) 傷害保険の更新

[広 報]

(1) 「北海道野鳥だより」148号~151号の発行

(2) ホームページの維持・運営

[探 鳥]

(1) 探鳥会27回(宿泊探鳥会を含む)

[役員人事]

探鳥幹事の人事において、門村徳男さん（むかわ町）と鷺田善幸さん（苫小牧市）が新たに加わり、田子元樹さん、山口和夫さん（ご逝去）、渡辺俊夫さんが退任した。

(探鳥)◎中正 憲信、梅木 賢俊、門村 徳男、栗林 宏三、後藤 義民、佐藤 幸典、佐藤ひろみ、竹内 強、富川 徹、成澤 里美、早坂 泰夫、松原 寛直、鷺田 善幸

[平成19年度役員]

顧問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵、井上 公雄
 会長 小堀 煌治
 副会長 戸津 高保
 監事 大野 信明、村野 紀雄
 会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子
 代表幹事 白澤 昌彦

(広報)◎樋口 孝城、岩崎 孝博、北山 政人、白澤 昌彦、島田 芳郎、高橋 良直、武沢 和義、道場 優、戸津 高保、道川富美子、山下 茂

(◎印は各担当の代表者)

幹事

(総務)◎岩崎 孝博 大町 欽子、蒲澤鉄太郎、栗林 宏三、佐藤ひろみ、品川 睦生、中正 憲信、松原 寛直、横山加奈子

会員数

	15.4.1	16.4.1	17.4.1	18.4.1	19.4.1
個人	346	341	349	321	316
家族	42	38	40	34	32
団体	2	2	2	2	2

注1 19年度家族会員は32家族で74人です。

注2 会費の前払いなどの関係から、予算書備考の会員数とは一致しません。

平成18年度 決算書

(収入の部)

項目	予算	決算	増減	備考
繰越金	470,491	470,491	0	
個人会費	660,000	650,500	▲ 9,500	前納分等を含む
家族会費	90,000	113,000	23,000	
団体会費	10,000	5,000	▲ 5,000	
参加費	30,000	38,000	8,000	新年講演会参加費ほか
売上金	139,000	150,475	11,475	カレンダー、バッジ他
寄付金	0	22,500	22,500	
雑収入	509	37,324	21,235	宿泊探鳥会剰余金ほか
合計	1,400,000	1,487,290	87,290	

(支出の部)

項目	予算	決算	増減	備考
印刷費	600,000	557,405	▲ 42,595	野鳥だより印刷費
通信費	150,000	151,710	1,710	野鳥だより郵送料ほか
会議費	40,000	33,580	▲ 6,420	幹事会、新年講演会
消耗品費	40,000	21,382	▲ 18,618	野鳥だより発送用封筒ほか
交通費	20,000	18,000	▲ 2,000	野鳥だより発送業務
報償費	92,000	92,000	0	事務所費用、講師謝礼
雑費	60,000	53,710	▲ 5,290	写真展、傷害保険など
予備費	398,000	10,000	▲ 388,000	弔慰費
合計	1,400,000	937,787	▲ 462,213	

1,487,290 (収入) - 937,787 (支出) = 549,503 (次年度へ繰越)

平成19年度 予算書

(収入の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
繰越金	549,503	470,491	79,012	
個人会費	640,000	660,000	▲ 20,000	320名×2,000
家族会費	90,000	90,000	0	30家族×3,000
団体会費	10,000	10,000	0	2団体×5,000
参加費	-	30,000	▲ 30,000	事業費に一括計上
売上金	-	139,000	▲ 139,000	
事業費	120,000	-	120,000	参加費、売上金ほか
寄付金	10,000	0	10,000	
雑収入	497	509	▲ 12	
合計	1,420,000	1,400,000	135,000	

(支出の部)

項目	本年度予算	前年度予算	増減	備考
印刷費	480,000	600,000	▲ 120,000	野鳥だより印刷費
通信費	170,000	150,000	20,000	野鳥だより郵送料ほか
会議費	40,000	40,000	0	幹事会、新年講演会
消耗品費	80,000	40,000	40,000	チェックリストほか
交通費	20,000	20,000	0	野鳥だより発送業務
報償費	55,000	92,000	▲ 37,000	事務所費用、講師謝礼
雑費	35,000	60,000	▲ 25,000	傷害保険を分離
損害保険費	25,000	-	25,000	雑費から分離
予備費	515,000	398,000	117,000	
合計	1,420,000	1,400,000	20,000	



円山公園

2007. 3. 4

石狩市 高橋きよ子

今日は天気も良く春を思わせる気候で暖かく気持ち良いスタートで始まりました！先日カワガラスを確認したとのことで見たい気持ちで歩きだしました！入口の所でマヒワを見ることができて、きれい！の声で始まり、ウソ、アトリ、ヤマガラをの声を聞いたり姿を確認したりして川の横をカワガラスを求めて歩くと、横の雪山、または前方と、シジュウカラ、カワラヒワ、ヒヨドリと鳥たちが一杯で進みません。うれしい・・・！！ミソサザイと叫ぶ声があり、初めて見るミソサザイの姿をつかむことができました。皆ミソサザイに夢中になり、私も双眼鏡を通して確認できて嬉しかったです。先頭でエゾリスとの声を聞き、エゾリスも確認できました。木から次の木へ、また次の木へと渡る様子を、また見事上手にジャンプするのを感じて楽しむことができました。かわいい！！沼にはマガモがつかいで泳いでいました。のどかで暖かい気候で楽しむことができて今日は最高のバード日です。

北海道神宮境内に入り、梅林を通り、桜林通りでメジロの姿を思いました。見たい。オンコの木の間にコゲラの姿を見ることができました。コゲラの雄は頭の横の毛の中に赤いはがあると教わり、何でも知っていると感じて聞いていました。動物園の横を通ったとき、マヒワが数羽上空を飛ぶのが確認されましたが、速くて双眼鏡では見られませんでした。

今日はウソの声を聞いたけれども、姿を確認できなかったのが残念でした。でも鳥達の元気の良い声、姿を見て楽しい一日でした。もう終わる頃、ブナの話がでて、ブナの実を食べられると教わり、「え、本当に食べられるの」と聞き返しました。果実です。知らなかったいろいろなことを教えて下さり、勉強になりました。担当幹事の方はいろいろ教えて下さり、また親切にして下さり、ありがとうございました。楽しい探鳥会でした。

【記録された鳥】トビ、マガモ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト
以上 21種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、阿部礼子、犬飼 弘、今泉秀吉、岩崎孝博、岩本英樹、大町欽子、押見悠子、河野美智子、影安則子、蒲澤鉄太郎、菊地佐和子、木口 航、佐々木泰夫、笹森繁明、笹谷俊章、佐野純子、品川睦生、白澤昌彦・瑠美子、高橋きよ子、高橋利道、高田征男、武沢和義、立田節子、田中 洋・雅子、田辺 至、戸津高保、

成澤里美、西谷真砂子、平野規子、広木朋子、辺見敦子、真壁スズ子、村上茂夫、山田甚一、山田良造、横山加奈子
以上 40名

【担当幹事】武沢和義、横山加奈子

ウトナイ湖

2007. 3. 25 札幌市東区 栗林 宏三

札幌からの道中は雨、ウトナイ湖に着いてもまだ小雨が降り続けている。幸い風は無い。参加者は20名を越えている。皆さん熱心ですね。

9時30分小雨のなか観察開始、オナガガモ、オオハクチョウ等が餌をねだって岸に上がってきている。その中にオオヒシクイが1羽が混じっている。対岸はもやって何も見えない。近くの湖面を観察し歩き始めてしばらくすると雨も止み対岸も見え始めたが、湖面の鳥の数が少なく少し寂しい。暖冬で北帰行が早まっているのか、他の餌場に分散しているのか。それでもヨシガモの10羽位の集団やオジロワシ、オオワシ、ミコアイサ、ダイサギ等を見ながらネイチャーセンターに到着。中に入りカラ、キツツキ類の他に珍しいミヤマホオジロを見て探鳥会終了。皆様雨の中お疲れ様でした。

【記録された鳥】ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウビ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、アカゲラ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ミヤマホオジロ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 38種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、白田 正、蒲澤鉄太郎、北山政人、木口 航、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、高橋良直、武沢和義・佐知子、田中哲郎、田中 洋・雅子、戸津高保・以知子、成澤里美、浜野チエ子、濱野由美子、松原寛直・敏子、山田良造、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子
以上 29名

【担当幹事】岩崎孝博、栗林宏三

モエレ沼

2007. 4. 8 札幌市北区 阿部 真美

野鳥観察を始めてから、毎日が特別の日に変わりました。毎日できるし、常にあこがれの鳥に出会えるチャンスがあるのです。毎朝目が覚めると、今日は何か出そうとワクワクしてしまいます。こんなに日々が楽しかった事っていつ以来だろう？と、野鳥との出会いをしみじみ有り難く思っています。そんな中でも探鳥会のある日は超特別の日です。

野鳥は勿論ですが、何より愛護会の諸先輩にお会いできる日なので。皆様の知識と技は職人の域で、毎回ただただ驚愕です。そして、そんな凄い人の集りだということに、探鳥会の後は穏やかに楽しかった想いだけが残ります。これは集団としては稀有な事だと思います。いつも「あー楽しかった」と思わず声に出してしまいます。だから、探鳥会は私にとって、野鳥と諸先輩に会うための大切な機会なのです。私は今、野鳥と愛護会に恋しています。

さて、モエレ沼のお話しでしたね。集合時間の40分も前に現地に到着したのに、既にたくさんの方が到着し視察中でびっくりしました。だから私の双眼鏡にこの日1番に入ったのは鳥ではなく人でした。この日の参加者は50人を超えたそうで、皆様に会うのが目的でもある私にとっては実に幸せな探鳥会でした。初めて訪れたモエレ沼の水鳥達に「こんな素敵な所あったのねー」と大感激。コガモの黄色やヨシガモの線の美しさを再認識したり、ホシハジロのおっかけをしたり、普段遠くに見ていた鳥達をじっくりと観察できました。今年お初のオオジュリンに感激し、こうして毎年感動するのが野鳥の魔力なんだなあ実感したのでした。そして、帰りの車中、友人達と、恒例の鳥合わせならぬ“愛護会・人合わせ”を楽しんだのでした。

皆様、いつも楽しい時間を有り難うございます。やる事なす事天然記念物と言われているこんな私ですが、これからも末永く宜しくお願い致します。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、シロカモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 34種

【参加者】阿部真美、今泉秀吉、今村三枝子、岩崎孝博、岩本英樹、牛込直人、景安則子、蒲澤鉄太郎、川東保憲、北山政人、栗林宏三、小泉三雄、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、齊藤一夫、佐々木泰夫、品川睦生、島田陽子、清水朋子、菅原晴美、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、田中洋・雅子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信、成澤里美、畑 正輔、浜田 強、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、平野規子、広川淳子、広木朋子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、道川富美子、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡辺吉宗・好子 以上 52名

【担当幹事】北山政人、樋口孝城

宮 島 沼

2007. 4.22

【記録された鳥】カイツブリ、ウsp.、アオサギ、トビ、

オジロワシ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、カリガネ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、ミコアイサ、キジバト、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、シジュウカラ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス 以上 28種

【参加者】阿部真美、石川勝祥、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、蒲澤鉄太郎、川東保憲・知子、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、佐藤幸典、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中 洋・雅子、戸津高保・以知子、長尾由美子、浪田良三、早坂泰夫、浜田典子、浜野チエ子、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、松山 潤、安 真一郎、山田良造、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子 以上 38名

【担当幹事】小堀煌治、佐藤幸典

野 幌 森 林 公 園

2007. 4.29 札幌市白石区 浜野チエ子

♪赤い鳥 小鳥 なぜなぜ赤い 赤い実を食べたり

「赤い鳥」に会いたいのであります！

待って、待っていましたみどりの日(イヤ昭和の日)は大沢口から出発です。ミズバショウとザゼンソウ、エゾエンゴサク、ときどき名残りのフクジュソウで道端は新緑と共にカラフルになりました。明るく優しい光と森の香り、爽やかな風を頬に受け、耳を澄まし目を凝らすと・・・いました！「アオジ」。最初からごめんね「アオジの君」顔色が悪くて黄緑に斑点が付くとくすんで見え、さえずりの節まわしも自分流の言葉にできず、悲しいかな初心者のわたくしめには判断がつかないのよ。おまけに「ジーッ」としてないっしょ。

空を飛ぶ小鳥、逆光になって止っているもの、地味な保護色系、衣替もあり、さえずり、地鳴きありの「君の名」をどうして先輩は呼べるのでしょうか。ただただ感心します。そして先輩のいつもご親切なご指導に大きな声で「感謝」です。

おなじみの「カラ」達、「ケラ」達の名が呼ばれ目で追い、双眼鏡で捕えてホッと、スコープを覗かせていただき可愛さ倍増。次々と「入りました」のありがたい声にかけ寄るのですが一瞬にして空っぽが度々。さえずりの余韻をひきずり、逃したくやささとまた会いたい気持が高まって「はまる」のでしょうか。野の花に対してはここまでにはならなかった気がします。

私のお腹がドラミングしてそろそろ血糖値が下がり始めた頃、水辺にはのんびり浮んだ「オシドリ」。「キンクロハジロ」はブッシュでかくれんぼ。なんと「オシドリ」は倒木に上ってジーッと陽なたぼっこをしているのです。チャンス！空腹も忘れて見入ってしまいました。やはり大きくて動きがスロー、きれいな色のは初心者向き、覚えました

よ。名前だけでなく、生態も学ばねばと思いつつ・・・。

鳥合わせでは30余種が発表され、私が確認できたのはカラスも入れて10種位。なんともはや・・・。「ウソ」もいたとのこと。「ウソ」といえば毎年1月に亀戸天神社での「鶯替神事」。「去年の悪しきはうそ（鶯）となり、まことの吉に（鳥）替えん」との伝えがあるそう。人は自分の弱さを知ること自然の中の一つ「鳥」に託し、癒されているのかも。「ウソの君」ありがと。末長くよろしくね。♪赤い鳥小鳥なぜなぜ来ない・・・♪白い鳥見たい、青い鳥も見たい・・・♪（北原白秋さんごめんなさい）

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ノスリ、オシドリ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、クロツグミ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 33種

【参加者】赤沼礼子、秋葉奎太郎、秋葉千多枝、阿部真美、板田孝弘、井上公雄、岩崎孝博、大島 武、梶本兼吉、勝見輝夫・真知子、蒲澤鉄太郎、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、佐々木泰夫、四垂義治、品川陸生、高橋きよ子、高橋利道、高橋良直、田中志司子、田中 洋・雅子、徳田恵美、戸津高保、長尾由美子、中正憲信・弘子、浪田良三、成澤里美、野坂英三、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、原美保、平野規子、広木朋子、辺見敦子、真壁スズ子、松原寛直・敏子、村上茂夫、山本和昭、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、吉中久子、渡辺好子

以上 49名

【担当幹事】後藤義民、中正憲信

天売島・焼尻島探鳥の旅

2007. 5. 3～5

札幌市南区 岡部 良雄

「海鳥の島・天売、オンコの森・焼尻。誰もが忘れかけている、人が自然にさりげなく寄り添うこと。ここにはスローライフの原点があります・・・」札幌駅の観光案内所で何気なく手にしたパンフレット。さらに「5月の島には、これから北へ向かう多くの渡り鳥が羽を休め、ホオジロ類やヒタキ類などの珍鳥も現れます。渡り鳥のほかに天売島ではウトウの繁殖期で・・・」これで決まり、タイミングもよく今回の探鳥会に参加させていただきました。

5月3日、早朝に札幌を出て一路焼尻島へ。現地で鳥類標識調査をしておられる有田智彦さんのガイドで海岸沿いの道からオンコの荘へと登っていきますと、ゲートボール場でセイタカシギが、雲雀ヶ丘公園ではクサシギがさっそくお出迎え。林間を飛び交い遠く近くさえずる野鳥たち、アオジだ！ ムギマキが出た！ あちこちで歓声があがり気分は早くもハイになりました。足元には青い絨毯を敷き

詰めたように咲きほこるエゾエンゴサク。これもきっと幹事さんのご配慮なのでしょう。

午後からはコシアカツバメを確認したい人、オオルリをもう一度探す人などなど、それぞれが自分のペースで気に入ったスポットを中心に第2ラウンドを楽しみました。有田さんからバンディング用に捕らえたノゴマ（翌朝にクロジ）を手手に即席講義。まじかに観る小鳥の美しさ、可憐さ、どこに何千キロと渡りをするエネルギーを秘めているのでしょうか、自然の脅威としか言いようがありません。

5月4日、早朝探鳥会。文字通り早起きは三文の得、ノスリ、アリスイ、トラツグミなどがリストに加わりました。午前中に天売島に移動し、写真家寺沢考毅さんのご案内でパークゴルフ場から雑木林の林間コースをたどりました。新しくミサゴ、ベニヒワ、アカウソ、シメなどを確認。焼尻島とはわずか4キロしか離れていないのに地勢も植生も違う、そのためか出会う陸鳥の種類もどこか違うように感じます。

午後は今回の探鳥会のハイライト、海底観光船で海鳥ウォッチングに出かけました。赤岩まで続く断崖はウミネコのコロニーとウミガラス、ウトウの巨大な営巣地になっています。そしてついにお目当てだったウミガラス4羽を波間に発見！ 興奮も最高潮に達しました。下船後、「海の宇宙館」でバードトークがあり海鳥の生態についてお勉強。暗くなってから赤岩展望台でウトウの帰巣を観察。ウトウはすでに抱卵中だそうですが親鳥がキビナゴをくわえて戻ってくる様子を観るには残念ながら時期が少し早いとのことでした。

5月5日、天売島での早朝探鳥会。ヤツガシラが最後の最後にお出ましになり島のおみやげも揃いました。羽幌へ戻って「海鳥センター」に立ち寄り探鳥会の総仕上げ。札幌へ帰るバスの中は2泊3日、探鳥三昧の旅を満喫した笑顔が並んでおりました。

渡りの終焉地を札幌と定め、5年前にやってきたばかりです。

日中はベテランリーダーのご指導で初見の野鳥が一気に



宿泊探鳥会 2007年5月5日 天売島

増え、夜はアルコール入り野鳥講座をたっぷりと拝聴するいい機会になりました。

みなさまどうもありがとうございました。

【記録された鳥】アビ、カイツブリ、アカエリカイツブリ、ハシボソミズナギドリ、ウミウ、ヒメウ、ゴイサギ、ダイサギ、チュウサギ、アオサギ、コガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、シノリガモ、ウミアイサ、ミサゴ、トビ、ハイタカ、ノスリ、ハヤブサ、クサシギ、タカブシギ、イソシギ、オオジシギ、セイタカシギ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ウミネコ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、ウトウ、キジバト、ハリオアマツバメ、ヤツガシラ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、ビンズイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、レンジャクsp.、コマドリ、ノゴマ、ルリビタキ、ノビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、マミチャジナイ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キマユムシクイ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、ムギマキ、オジロビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオアカ、カシラダカ、アオジ、クロジ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、コイカル、シメ、ニューナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ホシムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上 94種

【参加者】赤沼礼子、石橋和子、岩崎孝博、大町欽子、岡部良雄・三冬、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、河野美智子、小堀煌治、志田博明・政子、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中志司子、道場信子、徳田恵美、徳田和美、戸津高保・以知子、長尾由美子、中島慶子、中正憲信・弘子、成澤里美、西川喜久世、橋爪陽子、濱野千恵子、浜野由美子、早坂泰夫・みどり、原美保、広木朋子、道川富美子、山田登志恵、山本昌子、横山加奈子、吉中久子、鷺田善幸・幸枝、渡辺栄子 以上 44名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、清水朋子、岩崎孝博、栗林宏三、戸津高保

藤の沢探鳥会に参加して

2007. 5. 6

札幌市南区 矢嶋 一昭 (石山東小勤務)

「あゝホオジロだゝ」さっそくのお出迎えでした。図鑑などでよく見かけるのですが、さすがに本物はすごい。「ホオジロとアオジのツーショットだゝ」感嘆の声の響く中、探鳥会の始まりです。「もう、夏鳥が来ているのですね。きっとオオルリなどもあるかも・・・」の説明にわくわくと胸がふくらんでくる参加者たち。私には、懐かしい小鳥の村の探鳥会が始まりました。

私は、今年の3月末までこの「小鳥の村(藤の沢)」のお膝元の藤の沢小に7年間勤務しておりました。小鳥の村

の林道やけもの道は知り尽くし、若干の野草と野鳥の名前は、小学生に負けないくらいは知っているつもりです。しかし、7年間のもの間、四季を通して歩き尽くしているはずなのに、『この探鳥会』に来るといつも新鮮なコトを学ぶのです。小鳥の村の再発見とでもいうのでしょうか、見方が変わるのです。それは、野鳥観察+参加者の皆さんといろいろ話をする事で情報をたくさんいただけるからではないでしょうか。同じ自然を見ていても見方や考え方が異なるのは、野鳥のみならずいろいろな体験を積んでらっしゃる方々が集まっているからだと思いました。

「昨日は、天売・焼尻に夏鳥が来ていたのできっと藤の沢にも来ているかも？」と北海道規模で判断する方。「ハシブトガラはいたけどコガラはいたかな？」の話では、「鳴き声の違いを私は確認した」と耳でも野鳥を判断する方。「去年は、ここにマミチャジナイがいたから今年もいるかも？」と時期で探す判断をする方。私には笹藪で確認できないのに「あゝ下へ下がったゝ」と確認できる方。アオダイショウかシマヘビを確認するために必死に捕まえた方。私が野草の名前をお聞きすると「カヤツリグサ科はちょっと勉強してなくて…」と言いながらも同定して下さる方。高倍率の単眼鏡で遠くのオオジにいつも簡単に焦点を当てる方。など経験と好奇心と自然を愛する心の持ち主がたくさん集まりました。

一行は、小鳥の村の聖地「白鳥園」を出発して愛鳥広場を横切り、水の少なくなった六つが池を見ながら、どんぐり丘を登って行きました。アカゲラ発見！私は四季を通じてどんぐり丘～小鳥の村入口にいつもいるアカゲラを知っています。そのアカゲラ君でしょうか？頭が赤くなくメスとのこと。オスもメスも知らないで私はいつも見ていたのですね。

通称「藤野マナスル」の頂上に向かって一行は登っていきます。「チッチッチ…」と鈴虫のような鳴き声は聞こえるけど姿は見えないヤブサメ。「焼酎一杯グイッー」のセンダイムシクイの声。遠くにオオルリの鳴き声。「斑鳩」から名前がついたイカルの声。

頂上から白鳥園まで直行。「今日はあんまり野鳥を見られなかったなあ」と残念がる担当幹事さんですが、いやいや私には「藤の沢再発見」でした。野鳥観察とそれにまつわる話がミックスされると楽しさが倍増しました。大変なめになった藤の沢の探鳥会でした。

帰りに、この原稿依頼の文書の封筒についている『80円切手のヤマセミ』を見て本校の横を流れる真駒内川にいつもやってくる「ヤマセミ」のことを思い出しました。きっと、観察+まつわる話ができれば本校の小学生も喜ぶのではないかな？一人でも野鳥好きが増えるかな？それでいじめなんかなくなるのかな？思い、すぐにでもヤマセミのことを調べたくなりました。

【記録された鳥】マガモ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ミソサザイ、クロツグミ、ヤブ

サメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ハシホソガラス、ハシブトガラス 以上 26種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、板田孝弘、岩崎孝博、奥

井純一、勝見輝夫・真知子、菊部栄一、栗林宏三、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、白澤昌彦、田中 洋・雅子、戸津高保・以知子、浜野登茂子、早坂泰夫、樋口孝城・陽子、本間文敏、矢嶋一昭 以上 23名

【担当幹事】小堀煌治、品川睦生



【福 移】 2007年 7月 1日(日)
草原や河畔林で夏鳥たちを観察します。巣立ってから間もない幼鳥が見られるかもしれません。カッコウの声を聞きながら初夏の草原、河川敷土手道をゆっくり歩きます。

集 合 福移小中学校前 午前9時
(昨年の集合場所だった中沼青少年キャンプ場の隣)
交 通 地下鉄環状通東駅発、中央バス北札苗線
「福移小学校通」下車、徒歩5分

【野幌森林公園】 2007年 7月 8日(日)・9月 9日(日)
初夏と初秋の公園を楽しみます。7月と9月とではそれぞれ異なる趣きがあります。

集 合 野幌森林公園大沢口 午前9時
交 通 JR新札幌駅発、夕鉄バス「大沢公園入口」下車、
JRバス「文京台南町」下車 徒歩各5分

新 企 画 石狩川河口探鳥会を初めて開催

【石狩川河口】 2007年 8月19日(日)、9月30日(日)
秋の渡りシーズンの前半と後半に石狩浜・河口で主にシギ・チドリ類を楽しみます。はまなすの丘公園ビジターセンターの前から浜に出て、河口まで1.6kmほど歩きます。シロチドリ、メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、ミユビシギなどが見られます。ユリカモメやアジサシの群れにも会えるかもしれません。河口からは石狩川に沿って戻ります。夏、秋のはまなすの丘公園の植物も楽しめます。全部で4km弱の行程になります。

集 合 ヴィジターセンター駐車場 午前9時30分
交 通 札幌駅発中央バス7番石狩行
終点「石狩」下車、徒歩20分

【鶴川河口】 2007年 9月 2日(日)
鶴川河口付近の自然干潟や人工干潟でのシギ・チドリ類の観察が主目的です。

集 合：鶴川温泉「四季の館」駐車場 午前9時30分
交 通：札幌駅または地下鉄大谷地駅発、道南バス浦河行(ペガサス号)、「四季の館」前下車

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行います。
☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。
☆問い合わせ

北海道自然保護協会 011-251-5465
午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

鳥 民 だ よ り

◆平成19年度野鳥写真展出典者・作品◆

- | | |
|-------|-------------------|
| 荒木 良一 | ハヤブサ、ダイシャクシギ |
| 岩崎 孝博 | カリガネ、ゴイサギ |
| 小堀 煌治 | マナヅル、オグロシギとエリマキシギ |
| 志田 博明 | カワアイサ |
| 品川 睦生 | ギンザンマシコ、キレンジャク |
| 島田さやか | ミヤコドリ |
| 島田 芳郎 | ヒメクビワカモメ |
| 高橋 良直 | アオバト、ハマシギ |
| 手間本芳博 | ミヤマホオジロ(オスとメス) |
| 早坂 泰夫 | ウグイス |
| 原 芳明 | ミヤコドリ、ミツユビカモメ |
| 安 真一郎 | コサメビタキ |
| 山田 甚一 | ミヤマカケス、ハチジョウツグミ |
| 山田 良造 | ミユビシギ、コガモ |

以上 14名 23点

【新しく会員になられた方々】

- | | |
|----------|--------|
| 中村 栄蔵・君子 | 札幌市北区 |
| 高橋きよ子 | 石狩市 |
| 山崎 康廣 | 札幌市南区 |
| 岩本 英樹 | 札幌市中央区 |
| 木口 航 | 札幌市中央区 |
| 前田 輝明 | 札幌市北区 |
| 真壁スズ子 | 札幌市厚別区 |
| 阿部 真美 | 札幌市北区 |
| 景安 則子 | 石狩市 |
| 梶田 学 | 京都市北区 |

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>